

モンゴル視察記

著者	鳥居 光男
雑誌名	鹿児島大学歯学部紀要
巻	34
ページ	95-96
URL	http://hdl.handle.net/10232/20677

モンゴル視察記

鳥居 光男

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 先進治療科学専攻
顎顔面再建学講座 歯科保存学分野

平成25年10月27日から30日まで鳥田学部長、杉原教授とともに部局間協定締結の下準備としてモンゴル国ウランバートルにあるモンゴル健康科学大学 (Health Sciences University of Mongolia, HSUM) を視察した。

27日朝、新幹線で博多へ。福岡国際空港10:30発の大韓航空機で京城・仁川国際空港へ。12:00頃に着き、約1時間の待ち時間の後13:00発の大韓航空機で約4時間、ややあっけなく16時頃にウランバートルのチンギス・ハーン国際空港に着いた (ウランバートルは日本時間より1時間遅れ)。空港はゆるやかな起伏の草原 (今は冬枯れ) の中にあり、首都の国際空港とはいえ鹿児島空港よりやや小さめ。ガイドブックによるとシャトルバスはなく、路線バスの停留所も徒歩20分だそうである。タクシーは居るそうだが、私にはどれがタクシーか判然としなかった。しかし、我々にはシノ先生 (あるいはオノ先生? 名前がよく分からない。徳島大学医学部の解剖に留学し、同大歯学部で主に研究し学位を取得した。その途中で鳥田先生のところでも研究したこともある日本語のできるMDの女性研究者で、現在HSUMの解剖学教室の教員) が車で迎えに来てくれており、ホテルまで送ってくれた。彼女は今回のHSUM訪問のすべてのセッティングと送迎をしてくれたので我々は非常にスムーズに行動できた。

1日目、まず各国大使館があるウランバートルの中心地区に位置するHSUMの本部を訪れ、AMARSAIKHAN 副学長、AMARSAIKAN 大学院研究科長、ARIUNTUUL 歯学部長、ENKHTUYA 国際部長らの首脳陣と会見し、部局間協定の締結について意思を確認し合った。その後BATBAATAR 学長を表敬訪問した。本部の入っているビルには学生教育の施設もあり学生が多く行き来し複雑な建物であるが、本部機能の部分は扉で区切られ、中は落ち着いた雰囲気である。区切りの扉の周囲はショーウィンドウのようになってお

り、そこには多くの協定校や、訪問校の盾やエンブレムなどがたくさん並べられており、外国と交流するときにはこういう物も必要だなと感じた。中には日本の他大学の物もあるが、韓国などの物も見られた。特に韓国は強力で協定を進めており、校舎の中にはYonsei (延世大学と思われる) の名を冠した部屋がいくつかあった。日本の大学では徳島大学と強力に行っているようで、留学経験者が多いのか小さな教室くらいある徳島大学関係者の同窓会室のようなものが設けられていた。その後、解剖学教室を訪問し、実習室などを見せていただいた。

モンゴルでは、医学系の教育は国立のHSUMに統一し、ウランバートル以外にも3つのランチを置いている。HSUMは7学部 (Medicine, Biomedicine, Dentistry, Public Health, Pharmacy, Traditional Medicine, Nursing) からなり、学生数約5,700名、院生約1,000名、教員600名の規模である。歯学の基礎系の教育はSchool of Biomedicineで行われるため、歯学部には臨床系の5学科 (歯科保存学、顎顔面外科学、補綴・矯正学、小児・予防歯科学、歯科理工学) のみが置かれ、教員数は40名。5年制で1学年130名前後とすることである。

2日目、歯学部を訪問した。ウランバートルの中心から少し離れた (車で2~30分) 所にあった。鹿大の歯病をひとふた周り小さくした4階建ての建物である。病院と学部が一緒になっている。教員の主立った人は皆日本留学の経験者で (広島、愛知学院、徳島、医科歯科など) 日本語がよく通じ助かった。日本からの援助で作られた診療室などもあり、徳島大学のN名誉教授などは超有名人のようであった。チェアユニットなどは比較的新しいものであったが、建物自体はもともと病院として建てられたものではないそうで、やや手狭である。口腔外科の教授にオベ室、病室等も見せていただいたが、当日は使用しているように

は見えなかった。口腔外科の主力の臨床設備は他にあるのではないだろうか。ただ、モンゴルでは医学部や歯学部が自前の附属病院を持つことは異例だそうだ。民主化前は共産主義国で、当然医学教育もソ連流。歯学部には附属病院はなく、周囲の病院に分かれて臨床実習がおこなわれている。病院に臨床系教授がいたりするそうである。それを前出の AMARSAIKHAN 副学長（歯科医師、キューバで DDS、東京医科歯科大で PhD を取得）が歯学部長時代に政府の金を貰わずに自前で歯学部附属病院を建てた。やり手である。

こう書いてくると視察ばかり熱心に行っているようであるが、向こうも気を遣ってくれ、1日目の午後はチンギス・ハーン像テーマパークへ連れて行ってくれた。ウランバートルから東50数 km の草原の中の小高い丘のうえにあり、直径30m 位ある円筒形の建物を土台として、その上に銀白色に輝く巨大なチンギス・ハーンの騎馬像が置かれている。馬の頭の上は展望台になっておりチンギス・ハーンの顔を間近に眺められる。土台の地下は展示室になっており古代モンゴルからの出土品などが展示されていた。2日目の午後には市内にある国立民族学博物館を見学した。モンゴルの各部族の着物や古い時代の民具などがあって結構面白かった。

さて、最後に大学以外の町の様子に触れておこう。行ったのは10月下旬、初冬期である。気温は0℃前後。行く1週間ほど前はかなり雪が降ったそうで、あちこちに雪だまりが残り、郊外に出ると草原は薄く雪に覆われていた。しかし、風が余りなかったため、それほど寒さは感じなかった。もちろんビルの中は暖かい。モンゴルでは文字はキリル文字（いわゆるロシア文字）を用いている。共産化の時に変えられたそうだ。縦書きのモンゴル文字は今では特に勉強した人しか読み書きできないようである。我々にとってのくずし字のような感じであろう。さて、ウランバートルの中心部はものすごく車が多い。一応信号には従っているが、その他の所では傍若無人に走っている。しかも、その間を歩行者がこれまた傍若無人に横断してくる。恐ろしいことこの上ない。食事についていうと、ホテルの朝食は日本とそう変わらなかった。あちらの方と食べた5回のうち2回はロシア料理、2回はイタリア料理、1回だけモンゴル料理であった。モンゴル料理は基本は肉食でとくに羊や馬肉で野菜炒め、水餃子、パイ包みのような形で割とおいしかった（ただし馬肉の煮込みはちょっと・・・）。この時は口腔外科の教授との会食であったが、彼が馬乳酒を持ち込んでくれ

た。これは、Biomedicine の薬理の教授が持っていた物で、HSUM の校舎内は禁酒だそうであるが、この教授だけは別扱いで教授室に酒を持っているそうである。大学訪問の際にお目にかかり後であげるからと言われていた物である。私も一口は飲んだが、アルコールを含んだ酸味の強い飲むヨーグルトみたいな物だった。ただし、私はヨーグルトみたいな乳を腐らせたような物は口にしないのでこの表現が的を射ているかどうかは定かではない。

3日目にデパートに寄った後、シノ先生に空港まで送っていただき帰国の途についた。彼女のおかげで全てが順調に運び、快適な旅であった。今回のHSUM訪問では大歓迎していただいたと言って良いだろう。本務の学部間協定についても問題なく締結できそうであり、実り多い旅となった。